フェリックス・ガタリの『分裂分析的地図作成法』における四機能素の研究
― 美と永遠回帰という観点から ―

有馬 景一郎†

Research on Four Functors in Felix Guattari's "Schizoanalytic Cartographies"

Keiichiro Arima

序論

本研究ではフェリックス・ガタリ（Félix Guattari, 1930-1992）の『分裂分析的地図作成法 [1]』（1989）における四つの機能素,「物質的で信号的な流れF，実存的領土T，抽象機械状の門Φ，非物体的宇宙U（*CS*, p.40 / 48頁）[2]」について検討する。四機能素はガタリが晩年に至った思想的到達点である。本研究は「四機能素とは何か」という問いに答える試みである。

四機能素の検討は彼の生涯に渡る問題意識である「主観性の生産（*CS*, p.9 / 9頁）」の内実を明らかにするためである。ガタリ研究は多様な領域からなされている。しかし，ガタリの「主観性の生産」と「四機能素」の繋がりを論じた研究はまだない。本稿においては「主観性の生産」が「美的パラダイムへの移行（*CS*, p.252 / 314頁）」に関わるというガタリの主張に着目する。美的パラダイムへの移行とはどのようなことなのか。その内実を示すことによりガタリの四機能素の意義を解明する。

1. 四機能素とは― ラボルド病院の事例を踏まえて

1.1 ラボルド病院の事例の検討

ガタリは『カオスモーズ [3]』（1992）の中で，四機能素について彼の勤務先のラボルド病院を例にとる。ガタリの四機能素は「現働的なものと潜在的なもの，可能的なものと実在的なもの」という二つの軸に区切られた四つの領域で区別される。これら「四つの区域に属する実体は，固定した同一性を持たない（*CS*, p.41 / 51頁）[4]」。四機能素は，物質的で信号的な流れF，実存的領土T，抽象機械状の門Φ，非物体的宇宙Uという四つの区域で与えられる。以下で，本稿の四機能素の定義づけを行う。

領土Tについて「行動，身体の統一や情動の配属，個人史の原型となる主観性の基盤となる限定された領域」と定義する（*Ch*, p.96 / 108頁）。

流れFについて「さまざまな物質，信号の行き交う場，及びそれらの状態」と定義する（*Ch*, p.100 / 113頁）。

機械状門Φの本質であり機能は，受動性から能動性へ移行させ，患者の行動や感情のあり方を変化させる。機械状門Φは，ある一つの流れFを一対一対応から開放し，多方面に開く機能を受け持つ。機械状門Φについて「過去のものとなった系統と来るべき変異の系統流が出会う地点」と定義する（*Ch*, p.82 / 91頁）。

ガタリは，言語的なものにとどまらない，ある具体的な事物による効果を,「言表作用」として捉える。ある言表による言表作用は，言表作用のアジャンスマンによる。

最後の非物体的宇宙Uを取り上げる。他者性の宇宙とは，新たな他者の価値や意味の参照の基準である。この参照領域が非物体的宇宙Uである。ガタリは「反復し自らを肯定するが位置を特定できず，有限でも言説的でもなく，しかしながら特異的なもの，あるいはむしろ不可逆的に特異化するもの（*CS*, p.196 / 246頁）」によって宇宙Uは構成されると述べる。宇宙Uを「不可逆的に特異化するものによって構成される，潜在的な言表作用の編成である，非物体的な意味や価値の配置」と定義する。

1.2 ジャン・ウリの自己創造とガタリの主観性の生産

「主観性の生産」という概念を考察する。ジャン・ウリは，ラボルド病院の院長である。ウリが統合失調症者の創造行為を自己自身の創造と結びつけることに着目する。ウ

†2021年度修了（人文学プログラム）

リは「統合失調症者がなんらかのものを作るとき，何らかのものを構築するとき，彼が構築するのは自分自身であるのだ」と述べる [5]。ウリは統合失調症者の自己創造と芸術の「創造行為」を結びつける。統合失調症者は創造行為として，自己自身を構築する。つまり，統合失調症者は，創造行為において，外部のオブジェクトを製作すると同時に，それを通じて自己にみずから形を与えることにつながる。

ガタリのいう「主観性の生産」はどのようになされるのか。ガタリは主観性の生産を「社会的実践や個人的実践，自己構築の実践といったものの再特異化を行うこと」だと述べる。それは，「科学的」，「社会主義的」パラダイムから「倫理的－審美的」パラダイムへ移行することである。「倫理的－審美的」パラダイムとは，「自己自身の創造，自己と身体や世界や他者との関係の創造にもっと軸足をおいた」パラダイムである [6]。主観性の生産は，「自然的諸関係のなかに存在するものでは」なく，「絶えず発明し再創造」しなければならないものである（*QE*, p.303 / 269頁）。ガタリの「主観性の生産」も，外的オブジェクトだけの生産ではなく，自己にかかわる生産である。

2.　主観性の生産における美と永遠回帰

2.1　主観性の生産における美的なもの

ガタリは主観性の生産という概念において美的パラダイムへの移行を目指した。美的パラダイムへの移行とはどういうことか。ガタリは四機能素のメカニズムにおいて「美的特異化の永遠回帰」と「相似的（*CS*, pp.197-198 / 248-249頁）」をなす部分について述べる。ガタリは「美的特異化の永遠回帰」の註において，ダニエル・シャルルを引用する。

「芸術の永遠性は，差異化された永遠性であろう。なぜなら，まさにこの瞬間の回帰は，差異が肯定される瞬間，すなわち単一であることを望んでいるので永遠にあらゆる一般化を免れている絶対的に単一な質が差異を肯定される瞬間の回帰だからである [7]。」

シャルルは，ニーチェにおいて，美学あるいは美的という概念が，諸価値の評価の原理を見出し，諸価値の変貌の要素を生み出すことだと述べる。また彼は，ニーチェの永遠回帰が，創造者の創造と，熟視者の差異の読み解きにおける，最高位の肯定の瞬間であると捉えている。ガタリは芸術について以下のように述べる。

「創造が芸術の占有物でないのは明らかですが，変幻する座標系を発明する能力，いまだ聞かれたことも見られたことも，考えられたことさえないという質を生み出していく能力を，きわみにまで高めるのが芸術です（*Ch*, pp.147-148 / 169頁）」。

ここではガタリの芸術観における二つの要件が述べられている。ガタリにとっての芸術の第一の要件は，変幻する座標を発明することである。そして，第二の要件は，今までにない新しい質を生み出すことである。その二つをきわみにまで高めることが彼にとっての芸術の要件である。

2.2　永遠回帰受容の困難さ

ニーチェの永遠回帰はどのように受容されたのか。ニーチェは永遠回帰を「およそ到達しうるかぎりの最高のこの肯定の形式 [8]」と述べる。その内容とは，「一切の事物が永遠に回帰し，わたしたち自身もそれにつれて回帰するということ，わたしたちはすでに無限の回数にわたって存在していたのであり，一切の事物もわたしたちとともに存在していたということ [9]」である。永遠回帰が理解しがたいのは，無限に繰り返す宇宙観とそれが生の最高の肯定の形式であることが結びつき難いからである。

永遠回帰とは，宇宙が無限に繰り返されることと，ある瞬間の肯定において苦しみをも含めたすべての生を肯定することである。そして，ニヒリズムや超越的価値を批判しそれを破壊する永遠回帰は，別種の無関心を喚起する。永遠回帰は最も悲惨な出来事の肯定を受け入れるのかという非常に受け入れがたい難問を生じさせる。

2.3　ドゥルーズの永遠回帰

ジル・ドゥルーズは，この永遠回帰を承服することの困難さについて独特の解決方法を生み出す。それが『差異と反復』の主要なテーゼでもある，「存在の一義性」としての永遠回帰である。ドゥルーズは存在がいわれるあらゆるものに対して一義的にあるとして，存在は「存在がそれについて言われる当のもの〔差異〕の回帰，すなわちその反復としての永遠回帰という意味」と主張する [10]。この一義的とは，あらゆる存在者の存在を，上下関係や価値付けによって，階層構造に位置づける多義的な意味ではなく，唯一同一の意味で言われるという意味で一義的である。永遠回帰は，《同一的な》ものの回帰を意味しない。それは，永遠回帰は，同一的なものとは反対の，すべての先行的な同一性が廃止され解消されるような世界，「力能の意志」の原理を前提にしているからである。

ニーチェにおける永遠回帰とは，ニヒリズムによる反動的な諸力を克服するための，生の最高の肯定の形式である。ドゥルーズの永遠回帰は，以下の三つの「条件」を取り出すことができる。まず，永遠回帰は，投じられる骰子としての偶然性と，落下する骰子の必然性の往還である。次に，永遠回帰は，差異的で発生的な要素である力能の意志を原理とする。最後に，永遠回帰は，差異が生成として肯定され，回帰という同一性のもとで存在として肯定される。これら「三つの条件」をドゥルーズの永遠回帰から引き出すことができる。

3.　四機能素の「プロセッション」無限への往路

3.1　『分裂分析的地図作成法』読解の方法

*CS*の第五章から第八章において，四つの機能素が論じ

られている。四機能素の機能と変容に着目して検討することにより，各機能素がひとつのまとまりを形成していることが判明する。

自閉的な内面が他者の宇宙を受け入れる転換，このような肯定的な変容が「主観性の生産」ではないか。主観性の生産は非物体的宇宙Uと実存の領土Tが結びつくことである。四機能素において宇宙Uと領土Tの結びつきは「異質生成」と呼ばれる。異質生成へ至ることが四機能素のメカニズムの意義である。異質生成は，ガタリが「プロセッション」と「リセッション」とよぶ往復する運動の最終段階である（*CS*, p.197 / 247-248頁）。流れFにおける，ある偶然性の点から端を発した前進する動きがプロセッションである。そしてそこから折り返し，再度偶然性の点に戻る，回帰する動きがリセッションである。このプロセッションとリセッションの往復運動の動因となる五つの機能がある。五つの機能とは，「モジュール機能」「表現機能」「シナプス機能」「ダイアグラム機能」「実存機能」である。この五つの機能により「特異化」「不可逆化」「必然化」「異質生成」として自己は変容する。これら五つの機能を検証し，四つの変容に至る過程を考察する。この検討により，四機能素のメカニズム全体を一つの大きな動きとして捉えることができる。

3.2　モジュール機能

本節において，流れFと領土Tの間で働く第一の機能である，モジュール機能を検証する（*CS*, pp.178, 207 / 222, 259頁）。モジュール機能とはどのようなものか。

流れFと領土Tの両者の相互作用によって「感覚的，認知的，記憶的，情動的，想像的，…」といった様々な経験作用がモジュール的に構成される。さまざまな物質や信号の交流は，身体や情動を基盤として，調整あるいは変調されてひとまとまりのモジュールとなり，多様に経験される（*CS*, p.149 / 185頁）。

モジュール機能の第一段階は，経験の切れ端のようなものがまったく無秩序で漂っているような状態である。そこから第二段階では，単線的な時間の形式が構成される。第三段階では，種々の要素的な形式が生み出される。第四段階では，時間の形式と様々な要素的形式が結びついて，多様な経験作用が生み出される（*CS*, pp.152-156 / 189-193頁）。

流れFはさまざまなセリーの凝集として在り，領土Tはそれらのセリーをふるいわけ区別する。ただし，われわれがここまでの段階で見てきた領土Tの位置にあるのは「モジュール的主観性」であり，「実存的領土T」とは区別される。モジュール的主観性の最終段階は流れの感覚的平滑化である。

決定可能性の速度という概念について注意を促しておきたい。あるセリーは決定可能性の無限速度により構成され，それぞれのセリーの差異は無限に遅い速度で区切られる。決定可能性の速度は感覚や認知，記憶などを生起させ，セリーとして構成し伝達する。そして，それぞれのセリーを区切るのは，決定可能性の無限の遅さである。決定可能性の速度の速さと遅さによって，連続的なモジュール的経験作用が構成される。

流れFは，決定可能性の無限の速度がセリーとして凝集し構成される。モジュール的主観性は決定可能性の無限に遅い速度が，流れFのセリー間の異質性を受容することによって構成される。ガタリは，この遅い速度を「視点」としてのセリーの構成として捉えている（*CS*, p.157 / 195頁）。この「視点」が「主観性の生産」においてのちに重要になる。

3.3　表現機能

表現機能は二つの異なる働きに区別できる。第一の働きは，経験的な領域から異質なものが発生する側面である。第二の働きは，その異質なものが無限な領域に達する側面である。表現機能は実在的な領域である流れFから可能的な領野である機械状門Φへの開放として働く。この開放の帰結として，受動的で自閉的な主観性が，能動的で肯定的な主観性へと転換する。

流れFと領土Tにおいて，モジュール的な感覚的質の三角形（モジュール的線条化）および，表現の三角形（表現的平滑化）が構成されるとき，感覚的な質が生じる。表現と内容は，それぞれ素材，実質，形式により構成される（*CS*, pp.163-165 / 203-206頁）。

「機械状の剰余価値の剥離」とは何か。感覚的質の三角形m^{ts}，s^{ts}，f^{ts}と表現的三角形m^{e}，s^{e}，f^{e}が構成される。ある感覚の質とそれを表わす表現が三つ組みとして成り立つ。あるセリーは形式を持たない素材m^{ts}として，モジュール化された実質s^{ts}を媒介とし，別のセリーの形式f^{ts}と結びつくことでの感覚の質として実在する。同様に，その質の表現も素材m^{e}が実質s^{e}を介して形式f^{e}と結びつき表現として成り立つ。しかし，表現的平滑化の重要な点は，頂点s^{e}がf^{ts}から剥離する周辺で起こる。つまり，二つの三角形の重ね合わせにおいて，頂点の位置がずれることで「機械状の剰余価値の剥離」が生じる（*CS*, pp.163-165 / 205-206頁）。

質感s^{ts}が得られるためには，形式f^{ts}と素材m^{ts}が「張力によって影響しあ」うとガタリは述べる（*CS*, p.165 / 206頁）。本来は別個である素材と形式のセリーが結びつく。ガタリはこの相互のセリーの結びつきに力の働きを認める。素材と形式のセリーはもともと別個である。それら別個なセリーをひとつの対応関係として見なす力の働きがある。その働きがある視点の構成となり，ある実質としての感覚的質を生じさせる。表現の逆向き三角形では，別々の遅い速度が，ある受容性の素材と，受容性の度合いの差という形式として，表現の実質を媒介にして結びつき視点を構成する。そして，感覚の形式f^{ts}と表現の実質s^{e}の間のギャップにより「機械状の剰余価値の剥離」が可能的領域への開放を導く。この感覚の形式f^{ts}と表現の実質s^{e}のギャ

ップは，感覚の形式f^{ts}と感覚の素材m^{ts}との連帯関係を断ち，新しいタイプの流れを生み出す。

表現機能の第二の側面は，異質なものから無限な領域に達する動きである。表現機能は，内容の表現E^cと内容の相C^{Φ}の結びつきである（*CS*, p.169 / 211頁）。表現E^cと内容の相C^{Φ}とは何か。表現E^cとは偶然性の点P^cである。偶然性の点P^cとは，あたたかさでも，緑という色でも，数字の225でもなんでもよい。この点P^cは，機械状の剰余価値の剥離が起こる点である。この偶然性の点P^cは常に「可能的なものの相空間ϕ」と結びつく。この相空間ϕが内容の相C^{Φ}である。相空間ϕは，さまざまな視点の集合である。どういうことか。ガタリの例を参照する。数字225を作り出す手続きの全体（整数，分数，無理数，虚数など）が，この数字に関する相空間ϕをなす（*CS*, pp.167-168 / 209頁）。相空間ϕはP^cの可能なあらゆる生成を含む。四則演算や微分積分，サイコロの目の順番のような確率統計的な手続きのすべてを含むものが挙げられる。実体的な位置P^cは予測不可能というあいまいな性質を持つ。どういうことか。ガタリはあいまいな性質を説明する例としてパイこね変換を取り上げる。パイこね変換における，偶然的な点P^cを位置づけるもろもろの操作について，P^cに達する最後の操作をp_1，最後から二番目の操作をp_2，n回前の操作の状態はp_nである。任意のp_nは必然的であると同時に，すべての情報を把握しえないという意味で予測不可能である（*CS*, p.164 / 205頁）。偶然性の点P^cに向かうこれらの操作や手続きは，無限に繰り返されることが可能なのでフラクタル的，あるいは積分と呼ばれる。

ある個物や質感とそれに対するあらゆる視点の結びつきは，偶然性の点P^cと相空間ϕの結びつきである。ガタリはこの関係を表現－内容関係（偶然的な表現E^c，相の内容C^{ϕ}）と呼ぶ。偶然的な点（具体的な数字，パイ生地の一部，緑色など）は，表現であり，その内容は偶然的な点を構成する視点の集合全体である。表現機能により，ある表現（数字225，緑，…）が構成されるとは，ある個物とそれに結びつく視点のあり方が無限に拡がることである。表現機能とは形式を脱し，内容が無限化する脱形式化という動きである。

3.4　シナプス機能

本節では，門Φと非物体的宇宙Uの関係の検討に移る。ある一つの視点は別の視点をどのように獲得するのか。可能的な相曲面ϕと宇宙Uはどのように関係しあうのか。E^c_1とC^{ϕ}_1のひとつの表現－内容関係が成立するのは，構成された相平面が準拠の新しい宇宙Uの潜在性と両立し，C^{ϕ}_1において停止する時である（*CS*, p.168 / 210頁）。さまざまな偶然性の点P^cすなわち表現E^cは，新しい宇宙Uが成立するとともに，新しい構成要素E^c_2，E^c_3，E^c_4…として出現する（*CS*, p.173 / 215-217頁）。E^cC^{ϕ}の一つの関係が成り立つということは，「不可逆的に特異化するもの（*CS*, p.174 / 217頁）」により，宇宙Uが構成されることである。この宇宙Uが成り立つことが美的パラダイムへの移行である。

門Φと宇宙Uの相互関係として，特異化を生み出すシナプス機能が働く。このシナプス機能は，美的特異性の永遠回帰と「相似的」である。そもそも，偶然性の点P^cは，感覚的実質と表現の形式の間の剥離，すなわちギャップであった。この剥離は，無限の視点を可能的な相として産み出した。宇宙Uは，この剥離が生み出す相を対象とする言表作用の志向性，あるいは関心が特異的に自己肯定するものとして構成される（*CS*, p.196 / 246頁）。この志向性，あるいは関心が，視点を成り立たせるエネルギーとして働く。シナプス機能は，可能的な領域における，視点の集合にエネルギーを与える。どのようなエネルギーであろうか。

前節の門Φの検討における，偶然性の点P^cにおける視点の積分は，一つの相として区別された。ある相と別の相，あるいはあらゆる相全体の集合状態として区別されない状態が，宇宙Uにおいては同時に併存する（*CS*, p.190 / 239頁）。私見では，ガタリの思考でもっとも魅力的で，難解かつ特異な部分である。ある相曲面ϕ_1はひとつの偶然性の点P^cから，あらゆる見方の積分（全体）を無限小化して折り込んだ，ある時点θ_1における可能な状態である。この相空間は時間θ_2，θ_3，…θ_n…，における状態をも潜在的に含む。最終段階θ^{∞}は，共立平面（plan général de consistance 以下P.d.C.）と呼ばれる。ある偶然性の点P^c_1と別の偶然性の点P^c_2から引き延ばされた相曲面をそれぞれϕ_1とϕ_2とする。相曲面ϕ_1とϕ_2は相互に分離されていると同時に，お互いを潜在的に含む（*CS*, pp.187-189 / 236-238頁）。ある相は，潜在的に他の相を含むばかりか，最終段階のP.d.Cあるいはカオスモーズと一致する。カオスモーズとは，カオスとコスモスが浸透した状態である（*CS*, p.187 / 246頁）。

この宇宙Uとシナプス機能の動的な関係をどのように捉えたらよいのか。ある宇宙Uは，さまざまな相曲面を布置として定位することでその特異性を生み出す。それと同時に，あらゆる相曲面がすべて並存する。このことは，ある宇宙Uはあらゆる見方の集合への動きとしても併存していると解釈できる（*CS*, p.187 / 235頁）。

シナプス機能はある宇宙U_1を切断し，別の宇宙U_2や共立平面P.d.Cと中継し，切り替える。シナプスは可能的な領域を，変形する。そのことで可能的な領域は，「いかなるところでも現働的ではないと同時に必然的（*CS*, p.96 / 117頁）」となる。なぜか。ある相曲面は，ひとつの選択として部分化され，ある特異な宇宙Uを構成する。しかしながら，その構成は，ある相曲面が別の相曲面や，共立平面と連続的に共にある—ガタリはこれを「振動する」と呼ぶ—ことで現働的でなく，かつ，あらゆる相曲面全体の集合として遍在することで，必然的である。ガタリの別の言い方では，ある特異化がなされると，新しい相曲面は，ほかのさまざまな相曲面を折り畳み，宇宙Uのひとつの布置は，ほかのもろもろの布置を排除する（*CS*, p.210 / 263頁）。つまり，あらゆる可能性が折り畳まれ内部化される

ことにより，その外部の可能的なものを消尽しする。そして特異化するとは，特異的な宇宙Uを唯一のものとするからである。

宇宙Uがエネルギー的なものを与えるのは，この振動による（*CS*, p.204 / 255頁）。このエネルギーは物体を動かし，作用するエネルギーではない。むしろ多方向への視点の移動を可能にする「非物体的なエネルギー」である。シナプス機能とは，ある新しい質の見方と宇宙Uを構成することなのである。特異化とは，あらゆる方向への移動を可能にする，あらゆる見方を併存させることなのである。あらゆる方向への移動をガタリは超複雑と表現する。超複雑とは，「分子的でフラクタル的」な展開が，抽象機械状の開口部へ開かれることである。抽象機械状の開口部へ開かれるとは，宇宙Uへつながる展開である（*CS*, p.180 / 224頁）。超複雑とは，複雑性の要素や関係がただ単に増えることではない。そうではなくて，超複雑とは予測不可能なあり方，あらゆる方向への転換に開くものである。

ある可能的な相曲面ϕはシナプス機能により特異化され，かつあらゆる方向への移動を可能とし，宇宙Uとして構成される。ガタリは宇宙Uが「不可逆的に特異化するもの（*CS*, p.196 / 277頁）」によって構成されると述べる。また，特異的な自己肯定であり，内的な必然化でもある。

非物体的宇宙Uの定義は「不可逆的に特異化するものによって構成される，潜在的な言表作用の編成である，非物体的な意味や価値の配置」であった。宇宙Uは区別されない状態としてあいまいな状態が常に保たれる。そのような状態が特異化という事物に対して効果を生みだす，言表作用の作用体としてある。それは，新しい感覚の質を意味付け，価値付けるものの布置として成り立つのである。そしてその布置は，全く新しい質，つまり特異性を位置づける場として，その宇宙Uそのものが新たなものとして特異化することである。

シナプス機能は，永遠回帰の作用体である（*CS*, p.180 / 246頁）。そして，言表作用的な再帰という役割を担う。シナプス機能が永遠回帰の作用体であるとはどういうことか。力能の意志は，差異的で発生的な力の系譜学的要素である。シナプス機能は「不可逆的に特異化する」ことである。不可逆的に特異化するとは，特異化し続けること，特異化を生みだし続けることと考えられる。特異化とはまさに差異が区別されることであり，また「不可逆的に」とはその差異の区別が発生しつづけることである。シナプス機能が永遠回帰の作用体であるとは，そのように力能の意志と「相似的」であると解釈できる。この特異化は，主観性の生産の第一の変容である。

4.　四機能素の「リセッション」実在的領域への回帰

4.1　ダイアグラム機能

表現機能によるフラクタル化によって，可能的な相曲面ϕが広げられた。ダイアグラム機能は，この広げられた相曲面ϕをふたたび折り畳み，別のものを負荷して持ち帰る。その負荷されたものが，可能的なものの剰余価値δとか，ポテンシャル性と呼ばれる。持ち帰られるものとは何か。それはどのようなことを意味するのか。ダイアグラム機能は表現機能を逆行させる動きである（*CS*, p.219 / 274頁）。その逆行により，可能的なものの剰余価値，つまり予測不可能な方向への動きが実在的な領域へと回帰する。この回帰によって，ポテンシャル性を含んだ記号粒子が偶然性の点P^cへと持ち帰られることになる。

シナプス機能は，ある偶然性の点P^cに結びつくあらゆる視点の集合の相曲面ϕを，非物体的宇宙Uとして特異化し，あらゆる方向へ移動する力能を付与する。この特異化により，「超能動的で強力（*CS*, p.178 / 222頁）」なものが実在的領域にもたらされる。この超能動的という性質はどのようにもたらされるのか。宇宙Uの働きである潜在的言表作用は，常に何らかのものに関心を持っていた。この，ある対象への関心が超能動性を生み出す。ここである対象へ関心を持つとは，新しい視点を生み出す特異化についての関心である。これまでのガタリの記述から，超能動的とは，全く新しい視点を生み出す特異化と，それと同時にあらゆる方向への移動をもたらすこととが結びつくことだと解釈できる。シナプス機能による特異化された質は，四機能素を回帰することで，実在的領域に対して，以前の受動的な状態から能動的な状態への変容をももたらす。

ポテンシャル性を得た記号粒子とはどういうことか。異質な感覚は，強度的な質を得て，記号粒子となる。流れFは記号粒子の流れとなる。記号粒子とは，ある形式がある素材に対して特異な関心で結びつくこと，それと同時に，あらゆる方向への移動を可能にする力能が併存することである。

ダイアグラム機能は，実在的領域に不可逆的なものをもたらす。シナプス機能の特異化は不可逆的に行われる。宇宙Uは，不可逆的に特異化することによって構成されていた。ダイアグラム機能による逆行とは，感覚的な質が不可逆的に特異化することで，記号粒子に変容し，実在的領域にもたらされることである。記号粒子は特異化されただけの対象ではない。感覚的な質が記号粒子に変容するとは，その質自体が特異化された対象になるということと，それと同時に特異化することそれ自体が実在的領域にもたらされることなのだ。特異化とあらゆる方向への移動を可能にする力能がもたらされる。非物体的宇宙Uの特異化が不可逆的であるというのは，特異化し続けること，一旦特異化されたものが「一般化」されない脱一般化のことなのだ。この不可逆化は，主観性の生産の四つの変容の二つ目である。

さて，門Φの定義は「過去のものとなった系統と来るべき変異の系統流が出会う地点」である。前章における検討の時点では，門は新たな宇宙への端緒を開いていたが，来るべき変異とはまだ出会っていなかった。本節において，門Φは表現機能とダイアグラム機能の往復する地点である

ことを確認した。ダイアグラム機能は，宇宙Uという新しい宇宙の効果を実在的な領域にもたらす。門Φとは，過去のものとなる系統と変異の系統流が出会う地点として構成される。

4.2　実存的リトルネロと実存機能

四機能素の最後の機能は「実存機能」である。本節において，この実存機能および，ガタリ独特の記号作用である実存的リトルネロを考察する。ガタリはある表現の成立は語用論的な効果を生み出すという。語用論というのは，「社会的文脈のなかでの言語表現の使用」についての理論である。語用論は，命題の意味や，統語論的な視点ではなく，発せられた言葉が成り立つ文脈を視野に入れそれによる効果を念頭に置く考え方である。

このような記号的作用を持ち，実存的な変貌を引き起こすもの，それが実存的リトルネロである。リトルネロは常にポジティブな効果をもたらすわけではない。リトルネロは「弛緩状態」と「励起状態」というふたつの状態に区別される（*CS*, p.180 / 225頁）。同じように鳴らされている音であっても，その状況や受け手の状態によって，形骸化した「弛緩状態」をもたらすこともあれば，より能動的な「励起状態」をもたらすこともある。

四機能素における実存機能を検討する。実存機能（*CS*, pp.183-184 / 229-230頁）は，モジュール機能によって形成された感覚的モジュールを実存的領土Tへと変容させる。感覚的モジュールと領土Tは何が異なるのか。それは，表現機能による再開が絶えまなく起こることである（*CS*, p.178 / 222頁）。それは，感覚的モジュールという受動的な主観性が，実存的領土Tという能動的で，不可逆的に特異化する主観性へ変容することである。

この実存機能に働くものが実存的リトルネロである。それはどのようにしてか。実存的リトルネロは「まったく異なる事物の見方を求める（*CS*, pp.177-178 / 221頁）」。シナプス機能は，常に特異化された質に何らかの関心を持っていた。何らかの対象についての関心と，まったく異なる事物への見方が結びつくことで，ある感覚的質は，特異化された質となる。それが流れFを記号粒子の流れへと変容させる。

実存機能の働きは，流れFから領土Tへの「必然化」と言われる（*CS*, p.180 / 224頁）。必然化とはどういうことか。そもそもの四機能素のメカニズムが動き出す始点は偶然性の点であった。偶然性とは，有限的なものであり，予測不可能性というあいまいさを持つことである（*CS*, p.225 / 281頁）。四機能素のメカニズムは，まず偶然性の点から，可能的領域，非物体的宇宙Uに至ることで，有限から無限への移行として描かれた。しかしながら，ガタリの四機能素において重要なことは無限的な領域への到達ではない。ガタリにとって重要なことは，美的パラダイムへの移行である。偶然性の点は，特異化された記号粒子として再びその周辺に回帰してきた。ガタリとって必然化とは，偶然性の点が，再び偶然性を取り戻すことである。偶然的なものが偶然的なものに回帰することの意義をどのように捉えればよいのか。有限的で，予測不可能なものが，それ自身における特異的なものとして回帰するとは，それ自身の新たな力能の生成を見出し実在性を与えられることである。この必然化が主観性の生産における三つ目の変容である。さまざまな流れFはモジュール的主観性として調整されたが，この記号粒子の流れFによって，強度的に変調された領土Tへと変容する。次節で，最後の変容である異質生成について考察する。

4.3　異質生成

本節において，四つ目の変容の異質生成について検討する。この段階で，領土Tと宇宙Uが結びつき，自己自律的な異質生成として構成される。ガタリは，この宇宙Uと領土Tが一貫性（共立性）をもって成り立つことを「主観性の生産」であると述べる（*CS*, pp.110, 168 / 134, 210頁）。感覚的な質は機械状門Φを経由して，非物体的宇宙Uにより特異化された。そして，記号粒子となって流れFに回帰し，領土Tに変容をもたらす。宇宙Uが特異化されるとき，ほかの宇宙は排除される。それはシナプス機能の選別によってである。宇宙は強度的に自律化し，それ自体の内部の差異を肯定する。その主観性は，モジュール機能を構成した冗長性の記憶ではなく，強度的で純粋な繰り返しの世界に入ることである（*CS*, p.204 / 255頁）。このシナプス機能は，「能動的忘却」を行い，「実存化する永遠回帰を行う作用体」である（*CS*, p.185 / 274頁）。なぜ，能動的忘却と言われるのか。ダイアグラム機能は積分された無限の視点を折り込むことで門Φから流れFへと逆行した。その時に特異化によりある一つの視点が選ばれる。そして，無数の視点を折り込むことによって，それらの視点は消尽し，そのことである剰余的なものが生まれた。それがあらゆる方向への動きとしての剰余的なものであった。能動的忘却とは，シナプス機能による他の選択肢の消尽のことであり，それによる一つの特異化された方向を生みだすことであると解釈できる。その特異化された方向は同時にあらゆる方向への動きをも同時に併せ持つのだ。

それでは，強度的で自律的な自己，主観性の生産によって生み出された主観性とはどのようなものであろうか。それは二つの特徴を持つ。一つ目は，時間も空間もエネルギーもその範囲を定められない強度的な座標における主観性である（*CS*, p.185 / 274頁）。もう一つは，いかなる言葉によっても強度的な座標の作用体を探求できないということである（*CS*, p.221 / 276頁）。そのような主観性は記号粒子の流れによって構成される主観性と言い換えてもいいだろう。果たしてそれは何なのか。ガタリは，「情動による認知（*CS*, p.221 / 276頁）」でこのような主観性に達すると考える。このような強度的な座標への参入を，「精神分裂病との出会い」，あるいは「美的なひらめき」として例示する（*CS*, p.222 / 277頁）。

ガタリの『分裂分析的地図作成法』における実践は，四機能素のメカニズムを考察することで理解できる。精神疾患者における自閉的な内面，つまりモジュール的にしか働かない自己の内面から，ある時に異質な感覚が発生する。その異質な感覚はどこにも位置づけられないのだが，それによりあらゆる見方として拡張する。その拡張が新しいものへ開く表現となる。そして特異な見方を獲得することは，同時にあらゆる方向への移動の力能を獲得することでもある。そのことにおいて，ある感覚的な質が不可逆的に特異化するという契機がもたらされる。そのような強度的な質は，自己の経験を必然的なものと捉え，自律的に，常に肯定的に変容する「主観性の生産」となる。自己の領土を常に脱するような脱自己化する主観性が生み出される。ガタリの「主観性の生産」は，精神疾患者の回復においてのみ，意義を持つのではない。われわれは，日常の生活を紋切り型の対応で済ませ，一般化されたものとして受けとることを日々経験する。そのような時に，われわれが創造的であり，新しいものを生産しうるとすれば，それはガタリの考える「主観性の生産」として成し得る。

5.　四機能素再考

5.1　永遠回帰と四機能素の相似的条件

本稿第Ⅱ章第iii節において，ドゥルーズの永遠回帰を検討した。永遠回帰は「生の肯定の形式」であり，以下のような条件を取り出した。永遠回帰は，①投じられる骰子の偶然性と落下する骰子の必然性の往還，②差異的で発生的な要素である力能の意志，③差異の生成と回帰の存在としての二重の肯定，これら三つの条件をもつ。ガタリは，四機能素のシナプス機能が永遠回帰の作用体であり，永遠回帰と相似的であると考えていた。しかしながら，四機能素のメカニズムはガタリが考える以上に永遠回帰的である。主観性の生産それ自体が，永遠回帰と相似形であることを本節において指摘する。ここで「相似形」，あるいは「相似的である」というのは，いくつかの同じ条件を持つという意味である。ドゥルーズの永遠回帰に見出される三つの条件は，ガタリの四機能素においてどのように見出されるのか。

四機能素の構造は以下の三つの条件としてまとめることができる。ⅰ, 表現機能による異質な感覚の発生と，ダイアグラム機能による特異で強度的な質の回帰，そしてその往還。ⅱ, シナプス機能による不可逆的な特異化。ⅲ, 変幻する座標としての特異化する宇宙Uと強度的に脱自己化する実存的領土Tとが結びつく，異質生成としての生成と，その実存化である。このような三つの条件を持つものとしてガタリの主観性の生産は捉えることができる。ガタリが言及する，四機能素において永遠回帰と相似形をなす条件は，シナプス機能のみであった。しかしながら，永遠回帰の諸条件と，四機能素のメカニズムの諸条件は単なるアナロジー以上に，同等の条件を有するという点で「相似的」である。ガタリとドゥルーズの永遠回帰の相似性は，ガタリの四機能素において，ドゥルーズの存在の一義性が，形を変えて受容されていると考えてよい。しかしながら，ガタリの四機能素において特有な観点は，いずれの三つの条件も，脱形式化，脱一般化，脱自己化という脱化の動きを備えている。ガタリの四機能素は，脱化の動きにより構成されている。そしてその脱化の動きは，表現機能を端緒とする絶えずの再開である。このことから，ガタリの，主観性の生産とは「脱化の永遠回帰」であると言えよう。

5.2　決定可能性の速度の再検討

われわれは先に，ダイアグラム機能が「別のものを呼びこむ」ことを指摘した。ガタリは次のような原理を述べる。

「もろもろの形式とそれらの相互作用との認識が，《紆余曲折の末に》生命の出現とともにやがて生じるとするならば，その認識は，すでに何らかの仕方で，恐らく非常に異なった様態のもとに，別の存在論的水準において存在している（*CS*, p.230 / 287頁）。」ガタリはこの認識を「原認識」と呼び，このように述べる。「この原認識は，実存的共立性のあらゆる獲得や，構造的テリトリーもしくは脱テリトリー化されたシステムのあらゆる形成に，内在的に属している（*CS*, p.169 / 211頁）。」

このような認識は哲学史上，既に表現を与えられている。スピノザは『エチカ』の第二部定理八において，「非－存在 [11]」的な「様態の本質の存在」について述べている [12]。スピノザは，われわれが日常経験する，個物という有限様態の存在を持続と捉える。この定理は，それに対して神の無限知性においてのみ捉えることができる，本質の存在が神の属性において存在することを指摘したものである。ガタリの四機能素は，神の無限知性においてしか存在しえなかったある本質に，持続としての存在を与える，あるいは実在化を及ぼす実践であると言えるのではないか。そのことにより，これまでにない新しい見方が創造されるのではないか。

さて，スピノザにおいて，持続する個物は有限様態であり，他の原因から存在あるいは作用されるように決定される（『エチカ』上，第一部定理二八。82頁）。また，あらゆる個物は運動と静止，あるいは速さと遅さの比の関係を持ち，それを保持する（『エチカ』上，第二部，公理一，公理二，補助定理一，補助定理二，補助定理三，132-133頁）。われわれは先に，ガタリの決定可能性の速度という概念に注意を払っていた。そこでは決定可能性の無限速度によって，様々なセリーが構成された。また無限に遅い速度によって，諸セリーが区切られ視点として構成された。われわれはガタリの決定可能性の速度という概念にスピノザの有限様態と「非－存在」的な本質のあり方を補助線にすることで新たな解釈を付け加えることができる。決定可能性の速度とは存在の様態を限定する概念として考えることができる。決定可能性はdéterminabilitéであり，déterminableは「決定し得る」あるいは「限定し得る」と

いう語義を持つ。あらゆる個物は持続として存在を与えられており，有限である。決定可能性の決定とは，有限化されること，つまり持続において存在が限定して与えられることであると捉えることができる。また，決定可能性の可能性とは有限様態を構成する速度の比の関係の可能性なのではないだろうか。そのように考えると決定可能性の速度が無限であるとは，有限化される速度の比の関係が，無限の速度に達している状態，つまり個物として存在が決定される，あるいは限定される状態に至っていることである。また，決定可能性が無限に遅い速度とは，持続としての存在の決定に至らない状態，つまり「非－存在」的な状態にとどまることである。

ここまでは，スピノザの有限様態について，ガタリが独自の用語で言い換えたに過ぎない。ガタリの思考の独自性，あるいは特異な部分は，この決定可能性の速度の組み合わせについて別の有様を提示したことである（*CS*, p.214 / 268頁）。流れFの領域において，決定可能性の無限の速度$d^{+\infty}$と無限に遅い速度$d^{-\infty}$は，$d^{+\infty}/d^{-\infty}$という比の関係において表現される。本稿の第Ⅲ章のモジュール機能において確認したように，流れFは決定可能性の無限の速度と無限に遅い速度が区別されることで構成された。この二つの速度の比の関係が他の三つの領域では異なった構成関係を与えられる。それぞれ確認する。

領土Tの初期段階でのモジュール的主観性は，流れFにおける様々なセリーをふるい分け，区別した。この状態をガタリは決定可能性の速度を用いて，準拠のもろもろのセリーあるいは決定可能性$d^{+\infty}$を，速度$d^{-\infty}$により選別し分離したと述べる。このことをガタリは，（$d^{-\infty}\int d^{+\infty}$）と表現し，負の決定可能性が正の決定可能性を積分すると述べる（*CS*, pp.213-214 / 267頁）。この段階は，決定可能性の無限速度を停止させ，選択する無限に遅い速度の力が存在するだけである。つまり，領土Tは存在するセリー（$d^{+\infty}$）を，非－存在的なセリー（$d^{-\infty}$）によって捉えなおす働きがあると理解できる。この流れFと領土Tの決定可能性の速度の関係は，相補的であり，ガタリ自身も存在的なセリーと非－存在的セリーを対称的に捉えているだけのように思われる。しかしながら，この決定可能性の速度の関係は，機械状門Φと宇宙Uにおいて異なった在り方を呈する。

機械状門Φにおける，決定可能性の速度の関係を確認する。門Φにおいて，負性$d^{-\infty}$を捉え直す，速度$d^{+\infty}$で機能する一つの相曲面ϕが存在する（*CS*, p.214 / 267頁）。ここでは，脱テリトリー化された区画が共立性を与えられ，負の決定可能性の積分として，（$d^{+\infty}\int d^{-\infty}$）として表現される。端的にいえば，非－存在的なものが，存在化されると考えてよいだろう。視点としての遅い速度は，流れFや領土Tにおいて，存在するセリーの区切りに過ぎなかった。それらの遅い速度は，積分によってこれまでにない視点に存在を与えられることになる。脱テリトリー化された区画とは，この非－存在的なものの区画である。スピノザのエチカにおける表現を用いると，神の無限知性においてのみ存在していた本質は，有限様態としての持続を与えられる。決定可能性の速度は，実在的領域において，比という構成関係を与えられた。この構成関係は，門Φにおいては，積分という変形を強いられる。

最後に，宇宙Uにおいて，これら二つの決定可能性の速度が同時的に与えられる状況が描かれる。「際限のない複雑化の達成」のための決定可能性の無限の速度と，それらの達成の「最初の根源的な瞬間」における解消という，非常に独特な表現において，それらは描かれる（*CS*, p.213 / 266頁）。それらの速度の関係は還元不能な$d^{\pm\infty}$という表現を与えられる（*CS*, p.213 / 266頁）。この宇宙Uの決定可能性の速度は，門Φと宇宙Uとの関係の振動を描いていると考えられる。決定可能性の速度の比の構成関係は，可能的領域や潜在的領域において変形され脱化された。ガタリの思考は存在と非－存在の関係を比と捉えたところから出発し，それらの関係を脱化し変形するところまでに至った。

ガタリは，彼の独自の思考によって，有限様態の存在あるいは本質の有様にとどまらず，それらを構成する速度の比の関係自体を変形することについて，それまで誰も提示できなかった一つの思考の仕方を生みだした。この決定可能性の速度を検討する意味は何であろうか。われわれは，四機能素のメカニズム全体から永遠回帰の条件を取り出すことができた。ドゥルーズによると，永遠回帰の原理は力能の意志であった。ガタリの四機能素は，その力能の意志と同じ働きを担う宇宙Uと門Φの間に，振動する様を見出した。それは，永遠回帰の原理において，固定的に与えられるものが根源にはないこと示す。さらに，それまで持続として存在を与えられず，神の無限知性においてしか把握することができない，非－存在的な本質に，表現を与えられることを，非常に独特な仕方で描いている。持続的に存在する個物である「ある作品」や「ある生」は，創造や美という観点からは，存在と非－存在の比が変形され，脱化することと不可分なのである。つまり，美や主観性を生産することは，存在と非－存在の比の構成関係の脱化として考えることができる。

5.3　ガタリの四機能素の意義

ガタリの四機能素が持つ意義は以下の四つにまとめることができる。第一に美の生成の根底にある，永遠回帰の構造である。第二に主観性の生産という人間の精神的な働きにおいて，四機能素の機能と変容という観点から，永遠回帰と同じ条件を見出すことができる。第三にガタリとドゥルーズにおける思想の共通性と差異を明らかにする。第四にガタリの思想は，スピノザにおける持続的な存在と非－存在的な本質に構成関係を見出し，別の有様を提示することが可能となる。

特に一つ目と二つ目の意義は，ガタリとドゥルーズおよびニーチェの思考を検討することにとどまらず，我々が良く生きるという観点からも，広い射程を持つ。ガタリにお

いて芸術の要件は，変幻する座標の発明と，今までにない新しい質を生み出すことであった。主観性の生産において，この芸術の要件を当てはめるとすると，シナプス機能による特異化は新たな質を生み出すことである。また，変幻する座標とは，特異化がなされるたびに生み出される宇宙Uのことである。われわれが，名画や名曲，傑作と呼ばれる芸術作品において受けとる感動や情動は時代を超えて伝わる普遍的な力がある。ガタリは，「ある音楽作品が私に情報を与えるのと，その情報を受けとる私の能力と力量を形成するのとは，同時である（*CS*, p.230 / 287頁）」と述べる。ガタリにとって，美的なものや芸術作品が普遍的であるということは，その作品がもつ力のその鑑賞の都度の特異性の生成が普遍的なのである。それは，特異な質の生成と変幻する座標の二つのものの生成である。ガタリが四機能素という概念で表現しようとしたことは，精神疾患者の回復における「主観性の生産」と，美的なものの生成が永遠回帰的な構造を持つことである。ガタリにとっては，「主観性の生産」は正に美的なものの生成としてあったのだ。そして，われわれが生きる上で美的なものの生成は常に開かれている。ガタリの思想の意義，つまりガタリの主観性の生産は，美的なものの生成として実践すべきものなのである。

本稿の結論を提示する。ニーチェは永遠回帰を「生の最高の肯定の形式」であると捉えていた。ガタリは「主体の生産の別の様式」は「実存的再調和と自己価値化」という「新しい形式」であるという（*CS*, p.26 / 31頁）。そしてこの形式が，人間集団や個人にとって「生きる理由」になるのだ（*CS*, p.230, 287）。つまり，「主観性の生産」としての四機能素のメカニズムは，われわれが生きる理由となりうるのだ。果たして，それはどのような形式でありうるのか。主観性の生産は四機能素のメカニズムにおいて達成された。その四機能素は永遠回帰の諸条件を備えた動きであった。ガタリの四機能素は，脱形式化，脱一般化，脱自己化という三つの脱化の動きで構成されている。そこで生産される主観性は，脱化の動きが絶えず再開されるという意味で，永遠回帰的である。われわれは，本章第 i 節において，ガタリの四機能素は，「脱化の永遠回帰」であると捉えていた。ガタリが述べる，「生きる理由」になりうる新しい形式とは脱化の形式である。主観性の生産において生産される主観性とは，脱形式的，脱一般的，脱自己的な主観性なのだ。つまり，「生の最高の肯定の形式，それ自体が脱化の形式」であり，常に脱化すること，そのことが生きる理由となる。

結論

ガタリの四機能素における一連のメカニズムを解明した。ガタリの思想はメディア論や精神医療的な観点から論じられることが多い。主観性の生産と結びつけて『分裂分析的地図作成法』における四機能素の原理や，その意義について論じたものはこれまでなかった。本稿では四機能素について明らかにするために，「主観性の生産」とは「美的パラダイムへの移行」であるとの主張に着目した。四機能素を機能と変容の連関として考察した。

ガタリの思想の意義は，「主観性の生産」というわれわれの精神のメカニズムが，美的生成と同じ条件を持つことを明らかにする点にある。ガタリによれば，永遠回帰を「生の肯定の方式」として受け入れることは，われわれが「美的」であり，「創造的」であることを示している。またガタリの思想は，脱化することが「永遠回帰」の条件の根底をなすことを示唆しているのである。

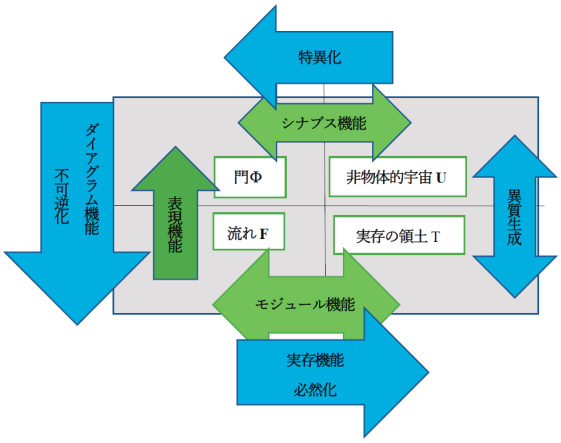

図 1　四機能素，五つの機能，四つの変容の総合（執筆者が作成）

謝辞

本研究を進めるにあたりまして，指導教員の野崎歓教授には，手厚いご指導を賜りました。本稿が少しでも読み易く，分かり易いものになっているとすれば，それは野崎先生のご指導のおかげです。口頭試問の副査を務めて頂いた江川隆男先生には，ガタリ研究進めていく非常に重要な示唆を頂きました。お二人には心から感謝いたします。

野崎ゼミのゼミ生の方々には，研究テーマが異なるにもかかわらず，質問やコメントを頂きました。皆様のおかげで研究を前に進めることができました。野崎ゼミのみなさま，厚く御礼申し上げます。

研究会や読書会において勉強させて頂いたみなさまには，色々なことを教えて頂きました。深く感謝いたします。

最後に，私が研究を進める上で，家族のサポートがなければここまで到達することは絶対にありませんでした。本当にありがとうございました。

注

[1] Félix Guattari, *Cartographies schizoanalytiques*, Galilée, 1989. 『分裂分析的地図作成法』宇波彰他訳，紀伊國屋書店，1998。以下，*CS*。引用には（*CS*, p.40 / 48

頁）のように，略号および原書，訳書のページ数を付す。

[2] 四つの機能素F，T，Φ，Uは以下の略号である。Flux matériels et signalétiques, Territoires existentiels, Phylum machiniques abstraits, Univers incorporels。翻訳では「四つの機能体」であるが，本稿では四機能素とする。実存的領土は，「実在的テリトリー」であるが，実存的領土とする。同様に非物体的宇宙は，「非物体的世界」であるが，非物体的宇宙とする。

[3] Félix Guattari, *Chaosmose*, Galilée, 1992. 『カオスモーズ』宮林寛他訳，河出書房新社，2004年。以下，*Ch*。

[4] *CS*において，Actuelの訳は「現実的」となされているが，本稿では「現働的」を使う。

[5] Jean Oury, *Création et schizophrénie*, Galilée, 1989, p.19.

[6] Félix Guattari, *Qu'est-ce que l'écosophie?*, Textes présentés et agencés par Stéphane Nadaud, Lignes, 2013. 『エコゾフィーとは何か—ガタリが遺したもの—』杉村昌昭訳，青土社，2015。pp.280-281 / 250-251頁。以下，*QE*。

[7] Daniel Charles, *Encyclopaedia Universalis*, article: “esthétique” ,Ⅶ, p.296.

[8] フリードリヒ・ニーチェ『この人を見よ』手塚富雄訳，岩波書店，1998，133頁。翻訳においては「方式」と訳されているが，「形式」とした。

[9] ニーチェ，『権力の意志』下，吉沢伝次郎訳，筑摩書房，2011，540頁。

[10] ジル・ドゥルーズ『差異と反復』上，財津理訳，河出書房新社，124頁。

[11] 江川隆男『スピノザ 『エチカ』講義　批判と創造の思考のために』法政大学出版局，2019，311頁。

[12] スピノザ『エチカ』上，畠中尚志訳，岩波書店，2011，121-122頁。